

ゲエルぼだ餅

語り手 平野 美津江

昔まずあったど。

あるところに大変根性の悪いばあさまがいて、どのぐらい根性が悪かったかというのと、うまいものは我が食うべし、ほしていやな仕事は嫁にさせっぺえーと、そういう姑ばあさまであったど。

そのばあさまが、ある時、これから出がげるっていうのに、隣からぼだ餅もらったと。

ところがばあさま、ぼだ餅大好きなんだ。

一食っていたでは時刻に遅れっちまう。したが食わねえで置いていって嫁に食わっちゃでも、これ困っちまうなあー。

ばあさま、ほれ、我がいやしいもんで嫁もいやしいと思っているわけだ。

一困ったなあ。なんとしっぺーと思ってばあさま考えだ。

一これはぼだ餅にまじないをかげでいぐに限っーとなったもんだから、座敷の真ん中さむつつり出して重箱の中のぼだ餅によっくこう言いつけていたがなあ、いやあまず悪いことはできねえ。通りかかった嫁さまが聞きちまった。

一あれっ、ばあさまなにしてやがんだどー

嫁さまがちょいと見てたれば、ばあさま、まじめな顔して重箱に首つつこんで、

「これこれぼだ餅、よっく聞げ。俺これがら用たしに行ってくっから、俺がいねえ間に嫁に食わちゃでは困っから、おめえたちこれがらゲエルなってる。で、嫁が蓋取って見たらばゲエルになっておどがせで、俺がけえって来て蓋取ったらばぼだ餅になれ。わがったが、まちがうでねえど」。

いくたびもそうやってぼだ餅に教えて出がげだんだど。まずまずごうだかりな姑だと嫁さま思ったんだが、

「ばあさま行ってこらっしょ」となって出してやったわけだ。

ところが、嫁さま、ばあさま出してやったあとに、考えれば考えるほどになんぼにもおさまんねえ。いやいやなんていう姑だべど、なんていうごうだかりな姑だと嫁さま、ごせやけてたんだが、

一待てよーと、

一俺は、あのばあさまんとこの嫁なんだから、嫁は姑ど同じことをしなくちゃなんねえわけだ。俺これからぼだ餅、ゲエルにするのを手伝うべーとなって、裏の田んぼさ行ってゲエルをしこったま捕まえで来て、どれぐらいの重箱だったかわかんねえんだが、中のぼだ餅みんなベローツと食っちまったあとで、ゲエルをゲェッゲェッと押し込んで蓋をして、元のところさあげておいたわけだ。

ほうで、仏壇にあげておいたから、ばあさまそんなことわがんねえなあ、勇んでけえって来たそうだ。

一なあ、早くけえってぼだ餅食うべえーなんて、ばあさませっせこせっせこけえって来て、

一今来たぞーとなって、仏壇の前に座って、仏壇のカネをチーンと鳴らして重箱下ろしてきて、座敷の真ん中さ置いだわけだ。ほうして重箱の蓋ちょっとゆるめたところが、重箱の蓋もこっと動くんだもん、

「ありゃーっと思って見たところが、中からおかしな格好がもそらもそらしてる。

ばあさま、あわてて蓋閉めた。

「これ、ぼだ餅。嫁でねえぞ、ババだぞ。まちがうでねえぞ、ババだぞ」と語った。ほうして重箱の蓋をスーッとこうやったところが、これ今まで窮屈で窮屈でやっとながまんしていたゲエルだち、まあ何とかして出る気になって、重箱の隙間さ手かけ足かけ鼻つん出しで、こうやってせこいゲエルがチョロッと出て、ピョンと逃げたから、さあ大変。ばあさまあわてて追っかけて行って捕まえて来て戻ってみれば、蓋の隙間からゲエルがみんな出ちって、もそらもそらピョコンピョコンとこうしているわけだもの、

「やー、これまちがうでねえ、嫁だねえぞ、ババだぞ」

「やー、これまちがうでねえ、嫁だねえぞ、ババだぞ」とかだつて、一匹捕まえて戻れば、あっちのゲエルが逃げでぐ。で、あっちを捕まえて戻れば、こっちのゲエルがはねでぐ。

「嫁だねえぞ、ババだぞ」とばあさま、涙こぼしこぼし追っかけたんだが、

ついにまず一匹残らず逃げられてしまった。

これゲエルぼだ餅という話。

出典 如月六日（きさらぎむつひ）さんが、福島県の語り部、遠藤とし子さんの話を基に語られたものを参考にしました。